坂村真民記念館
Sakamura Shinmin Museum

タンポポだより

2019
秋号
vol.30

友の会会員の皆さまと記念館を結ぶ会報誌

紅葉

どの木も
紅葉する頃となった
終わりを美しくして
散ってゆく
木々を見ていると
みほとけの教えを
彼等が一番よく
知っているような
気がする

館長エッセイ
【第三十回】
「来館者からのメッセージ」に
力をもらって

真民詩とわたし
宇和島東高校時代の真民先生の思い出
今村（いまむら） 威（たけし） さん

真民詩を読み解く ㉙
これからが本番、しっかり明るく生きる決意
「まだ序の口」

記念館からのお知らせ
企画展「若者たちに贈る真民詩
～二度とない人生をどう生きるか～」

館長エッセイ

【第三十回】真民詩に救われ、励まされた約2000人の想い

「来館者からのメッセージ」に力をもらって

平成31年3月から開催した、開館7周年記念特別展「真民詩とともに生きてゆく～坂村真民記念館7年の歩み～」の中で、この7年間に来館してくださった約2000人の方の「真民へのメッセージ」を要約して展示しました。

これは、この7年間に来館してくださった約8万人のうち、約2000人の方が、記念館へのアンケート用紙の「真民へのメッセージ」という欄に回答して下さったものです。

それぞれの思いを胸に、記念館に来てくださった方々が、真民詩と向き合い、真民詩と語り合い、何か自分の「これからの生きる道」「生きる励まし」を貰って帰って下さっていることが、良く分かりました。

約2000人の方からの、心のこもったメッセージを読んで、この記念館のあるべき姿と今後の方向性を示していただいた感じがしましたし、アンケートを読んだ私が、感動し、励まされることが、たびたびありました。

「記念館を開館して良かった。これからも、この人たちのために頑張って、この記念館を続けていかなければならない」と強く思いました。

書かれたメッセージは、本当に様々な思いが込められたもので、すべてご紹介したいのですが、紙面の関係もあり、その一部をご紹介してみたいと思います。

【来館者からのメッセージ】

「疲れた時、しんどい時にここに来ると励まされました。真民さんの教えを胸に自分のペースで生きていきます。」（50代女性）

「時々病んでしまって死にたいと思うときもありますが、産んでくれた母、周りに感謝して、生きていきたいです。」（10代女性）

「人間味と優しさを感じ取れる詩ばかり。自分自身、人への思いやりをもっと思うべきと教えてもらった。」（50代男性）

「心が折れそうになった時、真民さんの詩を思い出します。」（50代女性）

「生きる事を前向きに教えてくださってありがとうございます。定年後の人生、ちょっと見直してみたいです。」（50代女性）

「人として大切なことを簡潔にわかりやすく教えて下さってありがとうございます。」（50代男性）

「あなたの言葉で頑張ってみようという気持ちになりました。」（60代男性）

「人生への戒めをもらった気がしました。」（50代男性）

毎日を真剣に、一生懸命生きている方たちの「心の叫び」や「自分への戒め」の言葉もありますが、大多数の方は「真民詩を読んで救われたことへの感謝」と「真民詩によって前向きに生きる事を教えられたことへのお礼」「この記念館へのエール」を書いて下さっています。

坂村真民は、普通の人と同じように、いや、普通の人以上に悩み苦しみながら、いつも自分に向かって「この生き方でいいのか」「まだまだいかん」と自問自答しながら生きてきました。その坂村真民の生き方とそこから生まれた詩が、こんなに多くの人々に「生きる勇気と希望」を与えていたことを再認識するとともに、これこそがこの坂村真民記念館の「存在意義」であり「あるべき姿」であり、「進むべき方向」なのだと確信しました。

皆様の温かいご支援と励ましをいただいて、これからも一歩づつ、こつこつと、まだまだ真民詩を知らない多くの人たちに真民詩を届けていかなければ、と思っています。

来館者からのメッセージ

あなたの言葉で頑張ってみようという気持ちになりました　（60代 男性）

疲れた時、しんどい時にここに来ると励まされました。真民さんの教えを胸に自分のペースで生かしていきます。　（50代 女性）

時々病んでしまって死にたいと思うときもありますが、産んでくれた母、周りに感謝し、生きていきたいです。　（10代 女性）

家族や人間に対する愛情豊かな詩にハッと胸をつかれました。私も本気で物事にあたらねばと思う次第です。　（30代 女性）

人生への戒めをもらった気がしました。　（50代 男性）

忙しい毎日、先生の言葉で立ち止まり、前に進むことができます。　（60代 女性）

メッセージカードが涙で見えなくなりました。また来ます。　（60代 男性）

〝生きる〟事を前向きに教えてくださってありがとうございます。定年後の人生、ちょっと見直してみたいです。　（60代 女性）

やっと来館できました。人生これから。真民先生の真摯な生き方に少しでも近づけるように楽しく生きていきます。　（60代 男性）

一日一生、最後まで私たちに生き方を教えて頂き、改めて残る人生を学びの中で生きていきたいです。　（80代 女性）

私にも何かできる事はないかと探す」その心が欠けているんだなあと反省　（30代 女性）

心の洗濯ができました、頑張れる力となりました。　（50代 女性）

生きる力を与えてくださりありがとうございます。明日からまた前向きに生きて行けると思います。何かつらいことがあったらまた来ます。　（60代 男性）

人として大切なことを簡潔にわかりやすく教えて下さってありがとうございます。（50代 男性）

生きる力が湧いてきました。昨年は主人と二人で参りました。今年は主人が他界しました。1人で頑張ってみます。　（60代 女性）

心の中に優しく静かに全部の言葉が入り込んでくれました。　（60代 女性）

心が折れそうになった時真民さんの詩を思い出します。日めくりカレンダーを毎日めくっています。　（50代 女性）

また寄らせて頂きます。56才になってはじめて真民さんの世界に深く関わっていきたいと思うようになりました。　（50代 男性）

新しい気づきをありがとうございました。はっとして涙が出てきました。（50代 女性）

真民詩とわたし vol.30

宇和島東高校時代の真民先生の思い出

今村 威（いまむら たけし） さん（86歳）

松山在住で、一遍会理事・松山子規会相談役を務める今村威さんは、宇和島東高等学校で真民さんの同僚教諭であり、家族ぐるみの付き合いは真民さんが亡くなるまで続いた。その人柄と詩について、「名利を追わず、詩には雑念がない」と高く評価する今村さんが、思い出を寄せた。

◆わけへだてのない指導

私が宇和島東高校に赴任したのは昭和37年で、真民先生は国語科主任であられた。先生と私は、二回り違う酉年同士で、親子ほどの年齢差にもかかわらず、同じ目線でご指導をいただいた。

着任早々に発行された「図書館報」の4月号を見て感動した。冒頭に「へんろみち」と題する先生の詩が載っている。「へんろみち　たんぽぽの花　咲き続き」に始まる一四節の作品である。冒頭の真民詩は、前年の9月号から始まっていて、先生が吉田高校へ転任される昭和40年の3月号まで続いた。

◆生徒に慕われる

昭和39年3月に刊行された生徒会誌「鬼ケ城」には、担任をしていたクラスの生徒が、「オール詩人　三年六組坂村ルーム」と題して、「諸君、すでにご存じであろう。我が大家族の父であり、我が校唯一の詩人である坂村真民先生を。あの秋晴れの空のように澄み渡った目で、我等を励まし、力づけ、いかなる苦しみ、悲しみにも負けない人間へと、我々を、毎日毎日、一歩一歩と導いてくださる。」と書いている。

宇和島東高時代
（昭和39年年度卒業アルバムより）

薬師谷渓谷で事故があり、生徒が亡くなった。先生は清らかな小石をいっぱい拾ってこられて、一字一石の「般若心経」をお書きになり、渓谷の流れに投じて、冥福を祈られた。

運動会の仮装競争で、シュヴァイツァー博士の扮装をされた。仮装を活かした寸劇では、黒人の患者や看護師に扮した生徒たちも熱演し、常々博士を尊敬していた先生は、とても喜んでおられた。

白衣姿でシュバイツァー博士に扮した真民先生

◆昂（すばる）の思い出

真民先生の本名は「昂（たかし）」である。戦争末期、先生も軍隊にとられ、衛生兵になられた。看護婦長が星に詳しい方で、「昂」を「昂（すばる）」と読み違え、真民先生を「すばるさん」と呼んでいたそうである。そんなこともあって、先生が昂の星を知りたいと言われるので、秋の早朝お伺いして、仏海寺にそびえる大銀杏のてっぺんに輝いている昂を眺めたことがあった。

先日、久しぶりに、先生が住んで居られた仏海寺下のお住まいのあたりを訪ねたが、すっかり変わってしまっていて、先生に昂をお教えした思い出だけが残る。

仏海寺下の旧居（左の塀）周辺

これからが本番、しっかり明るく生きる決意

「まだ序の口」

まだ序の口（92歳）

九十二歳は
まだ序の口

百歳を目指す
しんみんよ
しっかりしろ
しっかりしろと
一羽の鳥が
鳴いてゆく

「全詩集8巻」7ページ

この詩は、坂村真民が92歳（平成13年）の誕生日の日に書いた詩です。

坂村真民は、小さい時から、体の小さなひ弱な少年でした。中学生の時には、身長が学年で一番低く、軍事教練の時に使う歩兵銃より小さいので騎兵銃を持たされ、徴兵検査では「筋骨薄弱第二乙」と宣告され、お国のために役に立たない人間と言われました。

そんな少年が、戦争を経て、戦後の混乱期も乗り越え、愛媛で家族とともに過ごしてきて、90歳を越え、92歳になった時に作った詩がこの詩です。

90歳を越えた頃から、真民は100歳まで生きることを目指して生きるようになり、真民にとっては、92歳はまだまだ序の口なのです。

真民が毎日書いていた「思索ノート」（平成13年1月6日＝真民92歳の誕生日）の中でも、「百歳まで生きる断定の想念を確立させるのだ。しっかりしろ　しんみん」と書いて、自分を励ましています。

※「断定の想念」とは、必ずそうなると、自分自身が断定して想うことで、真民の造語です。

また、その年の元旦の「思索ノート」には、「生きているということが一番大事である。わたしは、これから百歳まで生きるので、どんなことにも、気弱になってはならぬ。しっかと生きねばならぬ。本当の生き方をしなくてはならぬ。これからが本番である。明るく生きるのだ。しっかと生きるのだ。」と書いて、自らを戒め、励ましています。

その後も、平成16年5月2日（真民95歳）の「思索ノート」には、「しっかりしろしんみん　生きるのだ、生きるのだ、生きることが信仰だ。」と書いて、百歳まで生きることを自分に課して生きています。

私たち家族のものも、その頃は精神的にも肉体的にも百歳まで生きることは当然のように思っていました。

しかしながら、平成15年3月に2階の書斎で何かを踏んで足を滑らせ、腰をひどく打って以来、長い距離を歩くことが難しくなり、砥部に来て以来毎朝続けていた「重信川での彼岸の祈り」が出来なくなると、しだいに足腰が弱くなり、97歳の誕生日を越えて、8月頃から体調が悪くなり、12月に静かに息を引き取ることになりました。

真民自身も百歳まで生きることを、強く念じて生きていましたので、その事に関してはさぞ無念であったと思いますが、最後までしっかりと意識を持って97歳まで「坂村真民流の生き方」を生き切ったことは、人生の仕舞い方として理想的な生き方であったと私は思います。

企画展

「若者たちに贈る真民詩 ～二度とない人生をどう生きるか～」

期間 2019年 10月26日（土）～2020年 2月16日（日）

〈開催趣旨〉

坂村真民の生き方は、「人間としてどう生きてゆくか」を常に自分自身に厳しく問いかけ、その答えとして詩を書き、少しでもいい詩を書き続けることでした。人生の先輩として、苦しい事、つらい事、悲しい事をいっぱい経験してきた真民の詩は、若い人たちがその体験を共有することによって、「一つの道しるべ」としての役割を果たしているとともに、真民も若い人たちが、いろんな経験をし、失敗も重ね、時間をかけて成長してゆくことを心から願っていました。

私たちは、長い年月の中で失敗と挫折を繰り返しながら、「どう生きていくのか」を自分で考え自分の答えを見つけて生きてゆかなければなりません。
坂村真民の詩は、生きる希望と勇気を与えてくれる詩、命の大切さを考え生きることは尊いことだと思えるような詩、家族のありがたさ、家族を大切にしようと思う詩がたくさんあります。

今回の展示は、こうした真民詩の中から、小学生、中学生、高校生の皆さんに、読んでもらいたい詩を全館で展示しています。是非自分が好きな詩を見つけて、自分がこれから生きてゆくときに、参考になる詩を見つけもらいたいと思っています。

〈展示概要〉

第1展示室と中部屋では、これまで来館された若い方々からアンケート集計した「私の好きな真民詩」のベスト10と小学生、中学生、高校生がそれぞれ好きな真民詩を展示しています。前回の来館者全体のベスト10の作品とほぼ重なるものがあるのですが、代表的な真民詩がほぼ網羅された展示となっています。

第2展示室では、「館長が若い人たちにお薦めする真民詩」を、15点展示しています。どうぞ、多くの方々のご来館を心からお待ちしております。

〈展示構成〉

展示作品　〈第1展示室〉
1 念ず展示れば花ひらく（全文）
2 本気（全文）
3 タンポポ魂（全文）
4 二度とない人生だから（全文）
5 すべては光る（全文）
6 こつこつ（全文）
7 両手の世界（全文）
8 わたしの詩（全文）
9 しんみん五訓（全文）
10 存在

展示作品　〈第2展示室〉
若者よ（全文）
若い人に（全文）
うた（全文）
つねに前進（全文）
たんぽぽのうた（全文）
一年草のように（全文）
幸せの帽子（全文）
つみかさね（全文）
せい一ぱい（全文）
おむすび（全文）

経営理念

最大の会社より最良の会社
人さまに喜んで頂く仕事と
自分づくりをする

[関連グループ会社]
株式会社 クリオ　ホテルクリオコート博多
〒812-0012 福岡市博多区博多駅中央街5-3 Tel 092-472-1111

株式会社 宣翔物産
〒812-0857 福岡市博多区西月隈3-6-17 Tel 092-475-1151

『木は氣なり』

百年の木には百年の氣が宿り

千年の木には千年の氣が宿る

鳩寿四　真民詩

南木曽木材産業株式会社
〒399-5302 長野県木曽郡南木曽町吾妻1187　代表取締役　柴原 薫
TEL 0264-57-4000　FAX 0264-57-2006　http://www.nagiso.co.jp　メール kao@nagiso.co.jp

砥部の地で、医療、看護、介護の三位一体を実現する砥部病院

To-be [トゥービー]
supported by tobe hospital

介護付有料老人ホーム To-be
78居室/20㎡～24㎡(1F&2F)

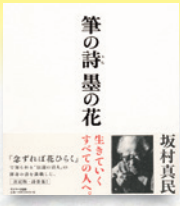
モンレーヴ砥部
Mon-Reve To-Be

住宅型有料老人ホーム
モンレーヴ砥部
18居室/2LDK 40㎡～90㎡(3F)

伊予郡砥部町麻生51-1（砥部病院横）TEL.089-969-0085　砥部病院ケアサービス株式会社

サンマーク出版 坂村真民の本

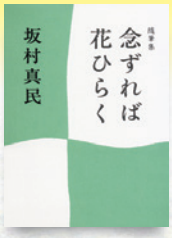
詩墨集 筆の詩（うた） 墨の花



●定価＝本体 3500円+税

坂村真民記念館所蔵の作品を満載！

随筆集 念ずれば花ひらく



●定価＝本体 1800円+税

初めての随筆集を復刻！

詩集 念ずれば花ひらく

10万部突破の超ロングセラー！

いま届けたい、生き方の道しるべ

詩集 宇宙のまなざし

詩集 二度とない人生だから

詩集●定価＝本体各1000円+税

サンマーク出版
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-16-11
TEL 03（5272）3166　FAX 03（5272）3167
http://www.sunmark.co.jp

医療法人
徳真会グループ

徳真会グループの想い

医療は人なり

徳真会グループは、1981年新潟県の旧新津市という地方の小さな町より始まりました。ユニット3台、スタッフ6名といったどこにでもある様な歯科医院からスタートし、以来39年間、常に患者さま本意の歯科医療のあり方を追求し続けています。また、国会依存度の低い自立した組織運営を模索し、「世界が舞台」という意識で組織創りを行ってきました。

現在、年間80万人の患者さまにご来院頂く、世界最大級の歯科医療グループとなっていますが、時代先駆の組織創りへの挑戦はまだまだ続きます。

新潟、宮城、東京、大阪、福岡に32医院。
詳しくはホームページをご覧ください。

徳真会グループ　検索
www.tokushinkai.or.jp

坂村真民記念館友の会 会員募集中

坂村真民記念館友の会は、会員の皆様と記念館との交流を図り、記念館を共に支え、育てていくことを目的とした会です。入会された方には会報と、真民グッズなどの記念品を贈呈します。

パスポート会員 年会費2000円	特典	会員証で入館無料1人 ほか
一般会員 年会費5000円	特典	会員証で入館無料1人 ほか
特別会員 年会費10,000円	特典	会員証で入館無料2人 ほか
法人会員 年会費10,000円	特典	会員証で入館無料2人、観覧券10枚贈呈 ほか

詳しくはホームページをご覧下さい　坂村真民記念館　友の会　検索

〈編集後記〉　次号より編集長を西澤真美子に交代します。少し内容も変えて、より会員の皆さんと共に作る誌面にしたいと考えています。どうぞ皆さんのフレッシュな提案、ご意見をお待ちしております。「坂村真民と箴言詩」展も好評開催中です。どうぞ、坂村真民に会いに記念館に来てください。お知り合いの方を誘って一緒に来てください。皆さんのご来館を心からお待ちしております。(西)

タンポポだより vol.30 秋号
令和元年9月1日発行　表紙写真：西澤孝一
発行元／坂村真民記念館友の会事務局
〒791-2132 伊予郡砥部町大南705　坂村真民記念館内
TEL089-969-3643　FAX089-969-3644

[坂村真民記念館]
開館時間／9～17時(入館は16時30分まで)
休館日／月曜(月曜が祝日の場合は翌日)、12月29日～1月1日
入館料／65歳以上300円、一般400円、高校生・大学生300円、小・中学生200円　※15人以上の団体は割引あり